

クラシック音楽に触れる

③

国。しかし最近、国からの補助金が次々と削られ、壊滅的とも言える状況にある。

古き良き時代は終わり、劇場が取り壊されてスーパーや駐車場になつたり、管理不十分で野ざらし状態の美術館も

見受けられた。しかし、そんな姿もあまり見かけなくなつたよ」と友人は言う。そのような悲惨なイタリアと比べ、日本の今後はどうなるのだろう。

いま日本は健全な社会を育てるため、国際的な地位を維持するためにもイノベーション(革新)が必要だと思う。

ストラと五千もの小さな声が一体となって飛んでくる生の音楽の迫力を体験する。お金には代えられない経験である。

このよつた芸術鑑賞・体験



6月19日
土曜日

連論

オーストリアの合唱学校

世界文化遺産を最も多く保有している国の一つ、イタリア。17世紀ころはベネチアだけで50以上のオペラハウスを抱えていた誇り高い文化大

ある。18年前、この国に私が住んでいたことは国立美術館で目を輝かせ、スケッチに夢中になっている小、中学生が

イノベーションに力を入れている国はたくさんある。たとえば、私が住むオーストリアでは最近小学校からバリュカルの選択ができるようになつた。また選択授業の多さ感を減少させるだけではなく、相互の価値観の尊重、

教育は子供たちに勇気と誇りを持たせ、クラシック音楽へ

生の音楽を一度も聞いたことない子供ばかりの社会が日本にあつたら、どうなるだろうか? そしてそのような子供たちが大人になつたら、どのような社会を作るのだろうか。渡辺和彦さんがこの欄で書かれたように教養の低い生徒たちを見守る親たちは喜びを感じ、人種的偏見を持つが広がるのである。

よるど、ウィーンはチューリヒを追い越し、今年世界で最も住みたい都市にランキングされた。そうだが、ウィーンの充実した教育制度を考えれば、そう驚くことではないのかも知れない。

生の音楽を一度も聞いたことない子供ばかりの社会が日本にあつたら、どうなるだろうか? そしてそのような子供たちが大人になつたら、どのような社会を作るのだろうか。渡辺和彦さんがこの欄で書かれたように教養の低い音楽大学講師が日本に本当に存在するのであれば、イタリアのよくなわびしい将来が日本にも間近に訪れるかもしれない。

中嶋 彰子

歌手。オーストリアで声楽を学ぶ。ウイーン・フォルクスオーバーの劇場で出演。「出光音楽賞」受賞。両親と姉が板倉町に暮らす。ウィーン。

合唱学校年末コンサートを毎年行う。きりびやかな舞台に出演者として立つ緊張感と興奮があり、また客席で鑑賞する兄弟や友人たちも、オーケストラと五千もの小さな声が一体となって飛んでくる生の音楽の迫力を体験する。お金には代えられない経験である。

このよつた芸術鑑賞・体験



プロオーケストラとの演奏を体験する子供たち=
2009年、オーストリア ©www.Jeunesse.at